

鹿屋体育大学生の社会人基礎力に関する研究

—性, 学年, 専攻課程による比較—

本多美美子*, 金高宏文**, 竹下俊一***

A Study of “Fundamental Power for Society Member” of the National Institute of Fitness and Sports Students: The Comparison with gender, grade and major.

Fumiko HONDA*, Hirofumi KINTAKA**, Shunichi TAKESHITA***

Abstract

The Ministry of Economy, Trade and Industry explains that power for being work is one of the most important things for student's acquiring skill in colleges and universities. The purpose of this study was to survey “Fundamental Power for Society Member” of students, and to compare differences of “Fundamental Power” between student's gender, grade level and majors. Five hundred and thirty five university students of National Institute of Fitness and Sports (NIFS) in Kanoya who major “Integrated Sport Science” and “Budo” answered the survey sheet that is able to measure “Fundamental Power for Society Member” produced by Riasec, Inc. This scale of the survey constructs 3 categories, such as “fundamental ability for personal (FAP)”, “fundamental ability for own (FAO)” and “fundamental ability for tasks (FAT)”, with subdivided 24 items.

Nevertheless the result about FAO did not indicate any interaction among grades and majors, those about FAP and FAT showed interaction analyzing with MANOVA. It was found that there was a significant difference between grade levels of the students who majored Budo, e.g., fourth year students got higher score than other grade students. However, all of the abilities showed effect of gender, in other words, female students were evaluated lower on all of abilities than male students. In conclusion, it is important to continue investigation in the long term in order to further examine the above results.

KEY WORDS : fundamental ability for personal, fundamental ability for own, fundamental ability for tasks, multiple analysis of variance

背景と目的

近年, 若者の就職活動風景 (たとえばリクルートスーツを着用して野球ドームの合同企業説明会に参加する若者や, スマートフォンを片手に街や駅を歩く若者) がTVや新聞によって報道されることがある。若者の就職事情は深刻視されており, 厚生労働省 (2010) の調査 (12月1日現在) によれば2010年度の大学等卒業予定者の就職内定状況

は, 68.8%で前年同期 (73.1%) を4.3ポイントも下回る過去最低の水準であった。このことは就職を希望する大学等卒業予定者の約3割強が就職浪人やフリーターとなる可能性を示唆している。

一方で, リクルート社が発行する就職情報誌カレッジマネジメント2011年7-8月版では, 2011年度の大卒求人倍率は1.68倍から1.28倍へと低下しているものの, 1倍以上は保たれており, 就職を希望する若者1人あたりに1企業の採用が見込

* 鹿屋体育大学プロジェクト研究員

** 鹿屋体育大学スポーツ・武道実践科学系

*** 鹿屋体育大学スポーツ人文・応用社会科学系

まれるということが示されている。

企業側は採用の意向を示すが、30%以上の就職希望者が内定を獲得できていない実態を鑑みると、採用者側と就職希望者側との間に何らかのずれが生じていると考えられる。たとえば経済産業省(2006)は、採用を希望する企業側の求める人材像と就職希望者が持つ資質との間にミスマッチが生じ、そのことが内定に結びつかない要因のひとつであることを指摘している。そういったミスマッチを軽減する試みとして、経済産業省(2006)は「社会人基礎力」という概念を各企業の経営方針や企業文化に基づく明確な指標として打ち出している。社会人基礎力とは、経済産業省(2006)が「職場や地域社会の中で多様な人々とともに仕事を行っていく上で必要な基礎的な能力」と位置づけ、「前に踏み出す力(アクション)」、「考え抜く力(シンキング)」、「チームで働く力(チームワーク)」の3つに大きく分類している。さらに能力要素が細分化されており、たとえば、「前に踏み出す力」は主体性、働きかけ力、実行力、「考え抜く力」は課題発見能力、計画力、創造力、さらに「チームワークで働く力」は発信力、傾聴力、柔軟性、状況把握力、規律性、ストレスコントロール力で説明されている。また、読み、書き、計算、基本ITスキルといった「基礎学力」と、仕事に必要な知識や資格といった「専門知識」とともに重要視され、さらに思いやりや公共心、倫理観といった「人間性、基本的な生活習慣」を備えることによって、職場や地域社会で活躍するうえで必要な能力を身に着けることができるとしている。「社会人基礎力」という概念が、若者や教育機関側に採用条件の一指標として発信されることによって、企業側との採用条件におけるミスマッチを軽減することが見込まれている。そのため、経済産業省(2006)は教育機関に対し、社会人基礎力の可視化および向上を目的とした取り組みの積極的な導入を求めている。

鹿屋体育大学では、平成22年度から文部科学省による「大学生の就業力育成支援事業」の選定お

よび経費措置を受けたことにより、全学的な取り組みとしてキャリア形成支援室の設立、就職に関する資質や能力向上の支援、就職に有益な情報を提供するためのカリキュラムやプログラムの導入を進めている。その取り組みの一環として、本学学生 of 社会人基礎力の現状把握を行い、それらを向上させることを目的としている。しかし、従来本学では社会人基礎力を含めた就職活動に重要とされる能力の測定が行われたことはないため、まずは学生の基礎的データを把握する必要がある。したがって、本研究では本学学生 of 就職活動に重要とされる能力の一つとされる社会人基礎力を測定し、現状を把握するとともに、性、学年、専攻課程別にデータを比較することで属性の違いによる社会人基礎力の特徴を明らかにすることとした。

調査方法

1. 対象者と方法

鹿屋体育大学に在籍する1年次生から4年次生の全学生数778名のうち調査協力に同意を示した学生599名(76.9%)に対し、集合調査法によるアンケート調査を行った。アンケート実施時間は10分程度で、実施時期は2010年10月中旬であった。なお、分析データは3年次編入制度を利用して入学した学生を除外した535名(68.8%)を対象とした。3年次編入学者は、1、2年次における鹿屋体育大学以外の教育が社会人基礎力に対して影響していることが予想される。本研究では、鹿屋体育大学での教育環境において社会人基礎力がどの程度育成されているかを明らかにすることが重要であるため、3年次編入は除外することとした。

2. 調査内容

本研究における社会人基礎力の測定には、株式会社リアセックが開発した社会人基礎力に関する調査票を使用した。この指標は、リクルートワークス研究所が開発した「基礎力(Generic Skills)測定項目」に、社会人基礎力要素に対応させるた

め「遵法性・社会性」「創造力」の2項目を追加した24項目で構成される(辰巳, 2006)。調査票は大分類, 中分類, 小分類に区分される(表1)。辰巳(2006)によれば, 大分類は企業を対象に実施された2000年以降の調査結果から認められる能力領域の共通項を基盤として, 対人基礎力, 対自己基礎力, 対課題基礎力に分類している。中分類および小分類については, 大分類である3つの基礎力の構成要素とそれらを形成する下位項目をそれぞれ中分類, 小分類としている。各質問項目における回答カテゴリーは9段階に設定されており, 進級や経験によるレベル変化を詳細に把握でき, 大学3~4年次で到達できる標準的レベルを中位(9段階の5)となるように調整されている(平尾ら, 2010)。本尺度の妥当性は, 抽出された要素と企業の挙げる選考基準との関連性を検討することによって認められている(辰巳, 2006)。

表1 社会人基礎力の構成要素

大分類	中分類	小分類
対人基礎力	親和力	親しみ易さ, 気配り, 対人興味・共感・受容, 多様性理解
	協働力	役割理解・連携行動, 情報共有, 相互支援
	統率力	話し合う, 意見を主張する, 建設的・創造的な討議
対自己基礎力	感情抑制力	セルフアウェアネス, ストレスコーピング
	自信創出力	独自性理解, 自己効力感・楽観的思考
	行動持続力	主体的行動, 完遂
対課題基礎力	課題発見力	情報収集, 本質理解, 創造力
	計画立案力	目標設定, シナリオ構築
	実践力	行動を起こす, 修正・調整, 遵法性・社会性

3. 統計分析

統計分析には統計ソフト IBM SPSS Statistics19を使用し, 性, 専攻課程, 学年間における社会人基礎力の比較は3要因の分散分析を実施した。

結果

対象者属性

性, 専攻課程, 学年によって分類した学生数および比率(%)を表2に示した。以下の表から本

研究に用いた対象者の属性として, 性別は男子学生全体が376名と女子学生全体の159名より人数が多く, 専攻課程はスポーツ総合課程が409名と武道課程の156名より多数であった。学年では1年次生が170名と他学年より多数であった。

表2 対象者属性別による学生数

学年 性	専攻課程		
	スポーツ総合	武道	合計
1年 男性	91(53.5)	29(17.1)	120(70.6)
女性	37(21.8)	13(7.6)	50(29.4)
計	128(75.3)	42(24.7)	170(100.0)
2年 男性	77(48.4)	31(19.5)	108(67.9)
女性	37(23.3)	14(8.8)	51(32.1)
計	144(71.7)	45(28.3)	159(100.0)
3年 男性	75(52.4)	30(21.0)	105(73.4)
女性	21(14.7)	17(11.9)	38(26.6)
計	96(67.1)	47(32.9)	143(100.0)
4年 男性	26(41.3)	17(27.0)	43(68.3)
女性	15(23.8)	5(7.9)	20(31.7)
計	41(65.1)	22(34.9)	63(100.0)

※()内は比率(%)

属性別による社会人基礎力の平均得点

社会人基礎力の大分類の平均得点を属性別に示した(表3)。対人基礎力は4.7点-6.2点, 対自己基礎力は5.1点-6.4点, 対課題基礎力は4.7点-6.2点の範囲であった。

表3 属性別による社会人基礎力の平均値と標準偏差

	スポーツ総合			
	N	対人	対自己	対課題
学年 全体	379	5.4(1.21)	5.6(1.19)	5.6(1.12)
1年 男性	91	5.2(1.19)	5.4(1.21)	5.5(1.10)
女性	37	5.1(1.24)	5.3(1.19)	5.3(1.07)
2年 男性	77	5.5(1.34)	5.8(1.34)	5.7(1.28)
女性	37	5.4(1.20)	5.6(1.27)	5.5(1.07)
3年 男性	75	5.7(1.14)	5.9(1.07)	5.9(1.16)
女性	21	5.1(0.92)	5.5(0.99)	5.5(0.87)
4年 男性	26	5.4(1.12)	5.5(0.99)	5.7(0.89)
女性	15	4.9(1.09)	5.5(0.82)	4.9(0.65)
武道				
	N	対人	対自己	対課題
全体	156	5.3(1.22)	5.6(1.31)	5.4(1.32)
1年 男性	29	5.0(0.96)	5.2(1.19)	5.2(1.33)
女性	13	4.9(1.24)	5.1(1.57)	4.8(1.40)
2年 男性	31	5.6(0.91)	5.8(1.21)	5.7(1.15)
女性	14	5.6(1.09)	6.0(0.81)	5.8(0.98)
3年 男性	30	5.3(1.27)	5.5(1.23)	5.2(1.06)
女性	17	4.7(0.97)	5.4(1.22)	4.7(0.87)
4年 男性	17	6.2(1.79)	6.4(1.64)	6.2(1.89)
女性	5	5.8(0.66)	5.1(1.51)	5.9(1.49)

※()内が標準偏差

性×学年×専攻課程による社会人基礎力の検討 (3要因の分散分析)

社会人基礎力における3つの構成要素別(対人

基礎力, 対自己基礎力, 対課題基礎力)に, 性×専攻課程×学年の3要因によって分散分析を行った(表4).

表4 性×学年×専攻課程による社会人基礎力の検討(3要因の分散分析)

	性		学年		専攻課程		性×学年		性×専攻課程		学年×専攻課程		性×学年×専攻課程	
	df	F	df	F	df	F	df	F	df	F	df	F	df	F
対人基礎力	1	4.90*	3	4.60**	1	0.60	3	1.26	2	0.03	3	3.35*	3	0.01
対自己基礎力	1	4.23*	3	3.81**	1	0.03	3	0.99	2	0.56	3	1.12	3	1.17
対課題基礎力	1	6.90**	3	4.31**	1	0.23	3	0.64	2	0.26	3	5.71**	3	0.47
誤差	519													

対人基礎力

性 ($F(1,519)=4.90, p<.05$) および学年 ($F(3,519)=4.60, p<.05$) に主効果, 学年×専攻課程 ($F(3,519)=3.35, p<.05$) に交互作用が認められた. 3要因(性×専攻課程×学年)による交互作用は認められなかった(表4).

学年と専攻課程に交互作用が認められたことから単純主効果の検定(Bonferroni法)を行った結果, 武道課程の学年間で1%水準の有意差が認められ, 1年次生と4年次生 ($p<.05$), 3年次生と4年次生 ($p<.05$) に差がみられた(図1). また, 4年次生の専攻課程間に5%水準の有意差が認められた(図1). すなわち, 武道課程において4年次生の対人基礎力得点 ($M=6.0$) は, 1年次生 ($M=4.9$) や3年次生 ($M=5.0$) よりも有意に高く, 4年次生に限定すると, 武道課程 ($M=6.1$) はスポーツ総合課程 ($M=5.3$) よりも有意に得点が高かった.

性別による主効果を検討した結果, 男子学生 ($M=5.5$) の対人基礎力得点が女子学生 ($M=5.2$)

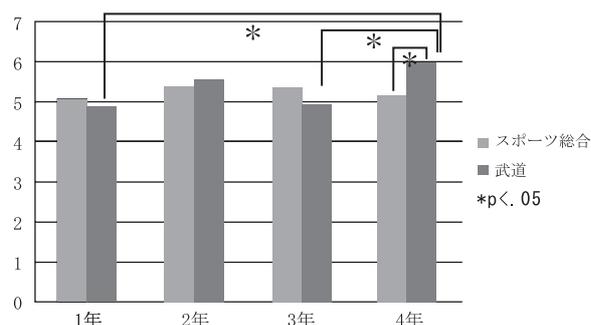


図1 対人基礎力得点

よりも有意 ($p<.05$) に高かった.

対自己基礎力

性 ($F(1,519)=4.23, p<.05$) および学年 ($F(3,519)=3.81, p<.01$) に主効果が認められ, 2年次生 ($M=5.8$) の対自己基礎力得点が1年次生 ($M=5.3$) よりも1%水準で有意に高かった. 性別では女子学生 ($M=5.4$) よりも男子学生 ($M=5.7$) の得点が5%水準で有意に高かった. 2要因と3要因による交互作用は認められなかった.

対課題基礎力

性 ($F(1,519)=6.90, p<.01$) および学年 ($F(3,519)=4.31, p<.01$) に主効果, 学年×専攻課程 ($F(3,519)=5.71, p<.01$) に交互作用が認められた. 3要因による交互作用は認められなかった.

学年と専攻課程に交互作用が認められたことから単純主効果の検定(Bonferroni法)を行った結果, 武道課程の学年間で1%水準の有意差が認められ, 1年次生と2年次生および4年次生, 2年次生と3年次生, 3年次生と4年次生にそれぞれ5%水準で有意差がみられた(図2). また, 1年次生と4年次生の専攻課程間に5%水準, 3年次生の専攻課程間に1%水準の有意差が認められた. すなわち, 4年次生 ($M=6.1$) の対課題基礎力得点が最も高く, 次いで2年次生 ($M=5.8$) が高かった. 1年次生 ($M=5.0$) と3年次生 ($M=5.0$) の得点は同程度であった. 専攻課程間

では, 1年次生(スポーツ総合; M=5.4, 武道; M=5.0)と3年次生(スポーツ総合; M=5.7, 武道; M=5.0)ではスポーツ総合課程が武道課程よりも対課題基礎力を高く評価しており, 4年次生(スポーツ総合; M=5.3, 武道; M=6.1)のみ武道課程が高く評価していた。

性別による主効果の結果は, 男子学生と女子学生の間有意差($p < .05$)が認められ, 男子学生(M=5.7)の得点が女子学生(M=5.3)よりも高かった。

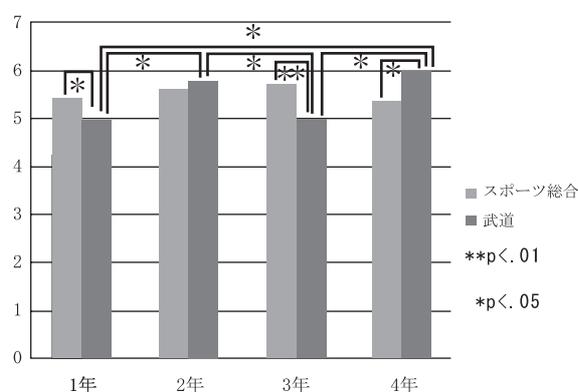


図2 対課題基礎力得点

考察

本研究では本学学生の就職活動に重要とされる能力の一つとされる社会人基礎力を測定し, 現状を把握するとともに, 性, 学年, 専攻課程別にデータを比較することで属性の違いによる社会人基礎力の特徴を明らかにすることを目的とした。

全学生数の約7割にあたる535名の回答を分析した結果, スポーツ総合課程では変化が認められなかった。武道課程にのみ, 対人基礎力と対課題基礎力に学年間での変動は認められた。両課程において, 進級することによる社会人基礎力の向上が認められなかったことについて, 社会人基礎力は大学への在学年数によって向上される能力ではなく, 各学年によって多様を極める状況, たとえばカリキュラム構成や運動部活動状況, 各種イベントなどによって変化することが示唆された。

武道課程のみ, 対人基礎力と対課題基礎力で各学年間による得点差がみられた理由については, 本研究結果から明確に言及することはできないが, 前述したような各学年, 各課程における大学内外の環境の差異が影響した可能性が考えられる。したがって今後は, 調査時期への配慮や各学年の社会人基礎力に影響を与えると考えられる要因について検討する必要があるといえる。また, 本研究は横断的研究であるため, 縦断的に調査を行うことで鹿屋体育大学生における社会人基礎力の推移を明確にしていくことが望まれる。

性別による比較では, すべての基礎力において女子学生は男子学生よりも低い値であったが, 女性は男性と比較して自己に関連する評価, たとえば内面的な資質(山本ら, 1982)や自尊感情(杉山・菅, 2010)を低く見積る可能性が指摘されている。したがって, 本研究の結果から本学の女子学生は男子学生よりも社会人基礎力が低いと一概に述べることはできない。社会人基礎力の評価を, 就職活動に重要な能力の評価のひとつとして確立するためには, このような性や個人による自己評価の差を解消するための方略を模索することが今後の課題といえる。

まとめ

本研究では, 鹿屋体育大学生の社会人基礎力の現状を明らかにするとともに, 性や学年, 専攻課程による比較から社会人基礎力の特徴を明らかにした。その結果, 対人基礎力において武道課程の4年次生が最も高く, 次いで2年次生が高い評価をしていた。性別では女子学生よりも男子学生に高い評価がみられた。

対自己基礎力において, 学年別では2年次生が1年次生よりも高い評価であった。性別では, 女子学生よりも男子学生に高い評価が認められた。

対課題基礎力において, 武道課程の4年次生および2年次生が3年次生や1年次生よりも高い評価であった。専攻課程間では, 1年次生と3年次

生においてスポーツ課程が武道課程よりも高い評価であり、4年次生のみ武道課程がスポーツ課程よりも高い評価であった。性別では女子学生よりも男子学生に高い評価が認められた。

本研究は鹿屋体育大学生の社会人基礎力に関する基礎的研究であり、他大学との比較や前年度得点との比較は行っていない。したがって、本研究によって算出された得点が、個々人の社会人基礎力の有無や実社会への貢献度にどの程度有効であるかをここで言及することはできない。しかしながら、社会人基礎力は経済産業省によって、今後とも認知および評価体制が推進されていくことから、鹿屋体育大学生と企業が求める人材の一致を目指すために、縦断的な社会人基礎力の調査の実施が望まれる。

付記

本論文の執筆において、国立大学法人筑波大学の三木ひろみ先生にご指導とご助言をいただきましたこと厚く御礼申し上げます。

参考文献

- ・平尾元彦・藤井文武・宮崎結花（2010）社会人基礎力の育成と自己目標管理—山口大学におけるCHECK-MANIFESTO- ACTIONループの試み—。大学教育7：35-46.
- ・経済産業省HP, (平成18年1月20日)「社会人基礎力に関する研究会—「中間とりまとめ」—」(<http://www.meti.go.jp/press/20060208001/shakaijinkisoryoku-honbun-set.pdf>).
- ・厚生労働省HP, (平成23年1月18日発表)「平成22年度大学等卒業予定者の就職内定状況調査」(<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r98520000010f10.html>).
- ・リクルートカレッジマネジメント169 (Jul.-Aug. 2011, 電子書籍), 株式会社リクルート:東京, pp.38.
- ・社団法人日本経済団体連合会HP, 「新卒者の採用選考活動の在り方について」(<http://www.keidanren.or.jp/japanese/policy/2011/001.html>).
- ・杉山映里香・菅千索（2010）学習活動における内発的動機付けと自己認知との関係について。和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要20：57-64.
- ・辰巳哲子（2006）すべての働く人に必要な能力に関する考察—学校と企業とが強要する「基礎力」の提唱—。Works Review1：1-10.
- ・山本真理子・松井豊・山成由紀子（1982）認知された自己の諸側面の構造。教育心理学研究30（1）：64-68.